

## 東京の池泉庭園の変遷に関する研究 —水源の変化を対象として—

白井彦衛・貫井文雄・竹林昭廣  
庭園学研究室

### A Study on the Transition of Gardens with a Pond in Tokyo -With particular reference to the changes in the sources of their water-

Hikoe SHIRAI, Fumio NUKII & Akihiro TAKEBAYASHI  
*Laboratory of Garden*

#### ABSTRACT

The main objectives of this thesis are to clarify, through a series of surveys conducted on 136 ponds and 65 gardens with a pond at different locations in Tokyo, Japan, the changes that took place in the sources of water and also the qualitative changes occurred to the gardens with a pond since the days when Tokyo, the nation's capital, was called Edo (Edo Period: 1600-1867).

The characteristics of a garden built in the Edo Period are found in the effective use of ponds. In those times, the gardens depended largely on the sea, river, underground water (spring water, well water) or the service-water for the sources but, among all those sources, one that was used by far the most was the spring water. Around the time when the name of Edo was changed to Tokyo, the city areas underwent a vast structural change. As a result, notable changes occurred to the water system in and around Tokyo, such as, the reclamation of waterside lands, abolition of the service-waterways and underground construction works causing the drying up of spring water sources. At the same time, vast qualitative changes were seen in the gardens with a pond as well.

Particularly remarkable were the decrease in number of the gardens using service-water from seven to nil, that of those using water drawn from the sea from six to one, and that of those using (spring) water from 37 to 18. No change, however, was seen in the number of the gardens using river as the source of water supply; the four gardens of this category remained unchanged. Our survey revealed that there were some that were of special types with respect to their source of water. And we were unable to clarify the sources of water of the ponds in 15 gardens.

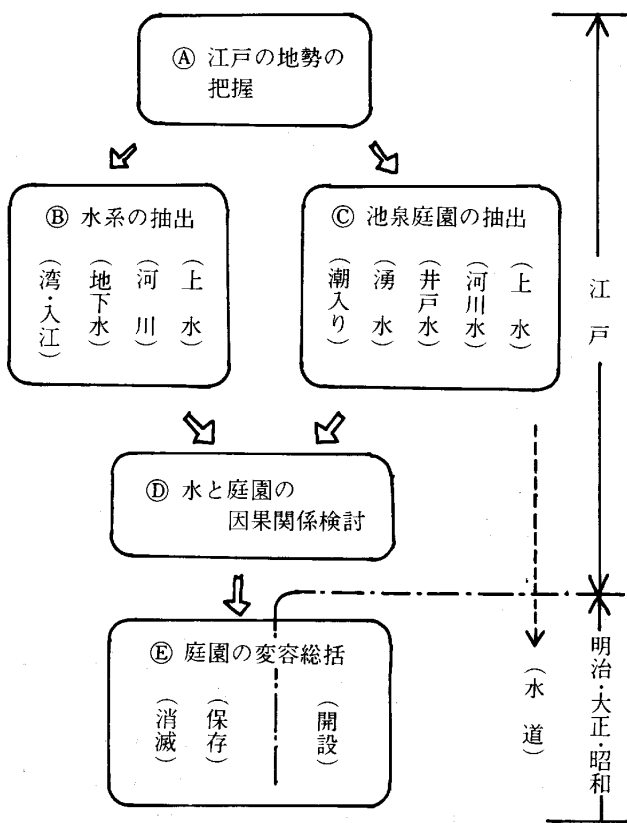
#### 1. 研究の目的と方法

筆者は、江戸期の庭園の復元に関する研究段階において、東京の池泉庭園が時代とともに大きく変容しつつあることを知った。その変容は主として水源の変化に影響されるものである。本研究は、水源の変化と池泉庭園の変容の因果関係を解明することを目的としている。

これまで池泉庭園の形態上の変遷については造園史の分野において研究されているが、水源の変化に着目して池泉庭園の変容を取り扱った研究は見当たらない。したがって、本研究はまだその前段階ではあるが、水源とい

う視点より池泉庭園の変容過程を辿る新しい分野を拓く序説となるであろう。

研究の方法は、①作庭時の水源と池泉庭園の実態について、主として『江所名所図会』などの文献・資料を用い、かつ補完的に現地踏査をし、②現時点のそれについては、主として現地踏査と文献・資料を用い、③中間の変遷過程は官公庁の文献資料と古老へのヒアリングによることとした。参考文献については巻末に掲載した。研究方法のプロセスはつぎのフローにより実施した。



## 2. 東京の水系

### 2.1 東京の地勢的特徴

東京の地形は西高東低であり、東から西へかけて、水辺、低地、台地、丘陵地、山地からなるが、池泉庭園に関係のある地形は、水辺、低地、台地の3類型である。

水辺は海岸と河岸であり、おおむね海拔0~2mの範囲

にある。東京湾、隈田川が対象となり、庭園は潮入型庭園として取り扱われている。

低地は主として江戸城以東の海拔2~10mの範囲の土地を指すが、江東の一部には0m地帯も存在している。庭園の水源は主として湧水と河川水である。

台地は主として江戸城以西の海拔20~50mの範囲の土地を指し、山の手や武蔵野と呼ばれている。水源は、低地と台地の接線上に崖部として、また台地の中間部に通称「ムメ」として存在する。庭園の水源は主として湧水、井戸水、上水による。

なお、地形は大局的には上記の3類型であるが、局的には開析谷が小河川に沿って西部に伸び、山の手を6地区に分け、また武蔵野台地の一部には段丘を形成している。

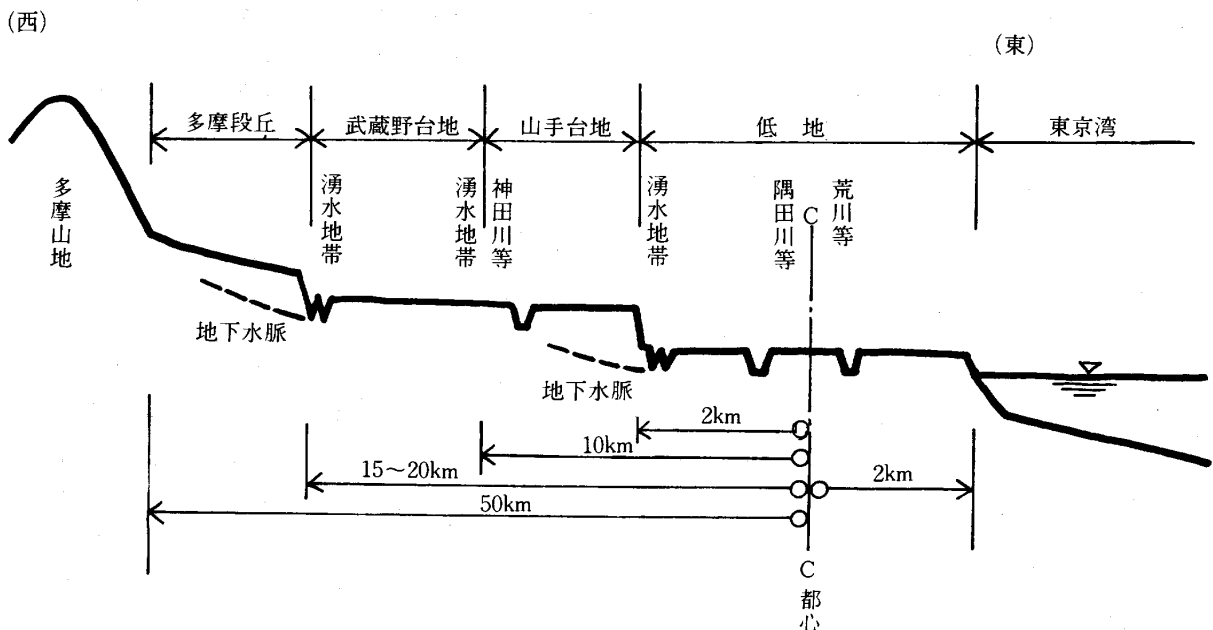
### 2.2 東京の水系の特徴

東京の水系は、海(湾)、河川、堀割、湧水、井戸水、水道(上水)からなる。

東京湾は、古代から気温の寒暖にともなって海岸線の移動を繰り返し、江戸以前は現在の下町の主要部は海面下にあったが、江戸期から今日にかけて約5000haの埋立が実施され、自然海岸はほぼ消滅した。

河川は、江戸川、荒川、隈田川、多摩川の大河川と石神井川、神田川、目黒川、呑川、仙川、野川などの中小河川からなる。大河川はかつて舟運に利用されたが、荒川のように明治以降に開削された河川もある。また中小河川は逆に暗渠化されたものもある。

堀割は、江戸期に下町低地に広く配置されていたが、現在は墨田区、江東区を中心に存在し、中央区ではほとんど埋め立てられるに至った。現存する両区においても



第2図 東京の地勢の概念図

現在、埋立が進行中である。水運が物資輸送の主役の当時、堀割は重要であったが、木場が東京湾の埋立地に移って以来ほとんど利用されていない。

現代の水道発達以前、上水は江戸の主要な給水源であった。神田、本所、青山、千川の上水がそれである。神田上水は天正18年(1590)開削された江戸最古の上水で、井の頭池を水源とした。水戸邸(後楽園)を経て神田方面へ給水した。本所上水は万治2年(1659)に開設され、本所、深川方面に給水した。青山上水は万治3年(1660)四谷大木戸で玉川上水から分水し、青山、赤坂、麻布、芝方面に給水したが、享保7年(1722)に廃止された。千川上水は湯島聖堂、寛永寺、白山御殿、浅草寺への給水のため元禄9年(1696)に完成した。

### 2.3 江戸の池泉とその分布

江戸期の地誌は数点現存するが、江戸各所の記述・挿絵を最も多く掲載している地誌は、『江戸名所図会』である。名所図会の全7巻中には江戸の風物が814地点示されており、ほぼ江戸の全容を伝えている。名所図会には165地点の水系に関する記述・挿絵がある。

本項においてはとくに庭園の水源となっている池泉を中心に往時の状況を抽出する。抽出した池泉についてつぎの項目を調査し、池泉の総括表及び分布図を作成した(第3図、第3表)。

- 庭園の有無(名所図会の記述・挿絵による)
- 現在地の確認(名所図会と地図の照合による)

第1表 東京における開削河川

河川名	開削年代	流路
荒川	明治44~昭和5年	岩淵—千住—東京湾
江戸川	~大正8年	行徳—東京湾
中川	~昭和3年	小岩—小松川—東京湾
新中川	昭和13~19, 24~38年	高砂—一之江—江戸川

注) 東京都資料

第2表 東京における暗渠化河川

河川名	暗渠化年代	旧流路
藍染川	関東大震災後	巢鴨—染井—不忍池
音無川	昭和初	王子—三ノ輪—山谷堀
谷端川	戦後	長崎—大塚—神田川
弦巻川	昭和10年	池袋—音羽—神田川
烏山川	戦後	烏山—若林—目黒川
北沢川	戦後	桜上水—代田—目黒川
蛇崩川	戦後	弦巻—三軒茶屋—目黒川
立会川	戦後	碑文谷—中延—東京湾

注) 東京都資料

●池泉の存続状況(文献・地図・踏査による)  
 なお上記項目に若干の不明な点がでてくるが、表中には不明のまま記入した。

『江戸名所図会』と第3表の関係はつぎのとおりである。

- 名所図会814地点中、水系(海・川・堀・池・泉)は165地点である。出現率は20.3%である。
- 全水系165地点中、池泉は136地点である。出現率は82.4%である。
- 池泉136地点中、江戸期の庭園は60地点、そのうち、現在34地点に現存するが、庭園の有無の不明なものがあるために、池泉地点に対する庭園地点の出現率は算定することができない。

第3表の池泉を実測図にプロットすれば、第3図のとおりである。

なお、第3図には一部の池泉が漏れているので、それらを補足しながら池泉の分布特性をしるせばつぎのとおりである。

#### ●武蔵野の湧水地帯の存在

武蔵野台地の地下5~15m 附近に地下水脈があり、都心より15~20kmの崖の下部に湧水として流出している。いわゆるムメの存在である。湧水はとくに吉祥寺、石神井、善福寺、野川流域など標高50mラインに多く、当時から寺社の庭園または観遊地として知られている。

(事例) 深大寺、国分寺、妙高院、弁慶硯水の井、常盤の清水、井の頭池、三宝寺池、高源院、(善福寺公園)

#### ●台地と低地における接線の湧水地帯の存在

東京の市街地の中央部にはフィンガー状に台地部が突出しており、上野、本郷、小日向、麴町、赤坂、白金、高輪の台地がこれにあたる。台地と低地の接線は崖地を形づくり、崖地下部に湧水があり、池泉または井戸となっている。

(事例) 東海禅寺、東禅寺、金王鷹産湯の水、甘露水、神仙水、(南部家庭園、紀伊家上屋敷・下屋敷庭園、松平家庭園)

#### ●低地、凹地における湧水地帯の存在

低地部、凹地部にも多くの湧水が存在していた。それらの多くは寺社、大名屋敷に組み込まれ、庭園として活用されたものがある。

(事例) 神田が淵、妥女の井、不忍池、姥が池、長命水、亀戸天神、伝法院庭園

#### ●河川沿いの湧水、池泉の存在

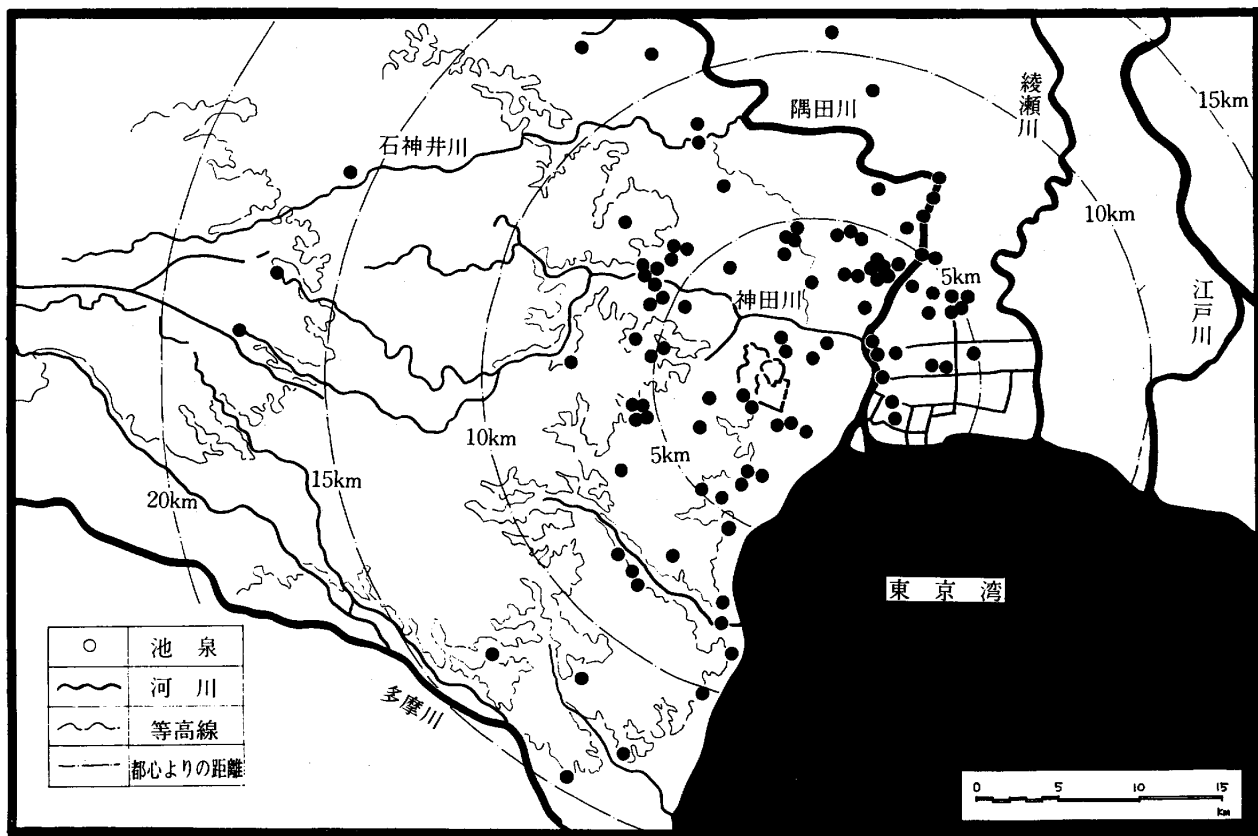
東京の大河川、隈田川、荒川、多摩川の中で、とくに荒川は低地を高水位で流れるため、周辺の低地に浸透し、数カ所に伏流水を集めた池沼を残した。今日その多くは

都市化により埋め立てられたが、1カ所に池泉が現存する。

小河川としては、神田川、目黒川、立会川、野川など

があり、小河川はいずれも西郊部に水源をもち、東京湾に注いでいる。

(事例) 鏡が池、(見次公園)



第3図 江戸の池泉の分布図

第3表 江戸の池泉の総括表

①卷之一

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
主水の井 (護持院原の林泉)	千代田区	×	井戸	×	(蓮池)	港区	○	池	×
神田が淵	"	○	池	×	柳の井 (蓮池)			井戸	×
お玉が池	"	×	池	×	※ —	"	×	池	×
采女の井 (織田有楽高等宅の林泉)	中央区	×	井戸	×	綱が産湯の水	"	○	井戸(湧水)	○
	"	○	池	×	※ —	"	×	池	×

②卷之二

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
浴鳳池	品川区	○	池(湧水)	×	※ —	大田区	×	池	○
袋竜井			井戸	×	硯の井	"	○	井戸	○
磯の清水	"	×	井戸	×	千束池	"	×	池	○
竜が淵	"	○	池		(功德水)	"	×	井戸	○
権現御手洗池					光明寺池				
延命水	"	×	井戸(湧水)	○	杉の本の霊泉	"	×	井戸	×
了海上人産湯の井	"								

◎卷之三

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
柳の井	千代田区	×	井戸(湧水)	○	盤井	世田谷区		湧水	
玉川の滝	"	○	滝	×	(霊泉)	狛江市	×	池(湧水)	○
桜が井	"	×	井戸	○	—	渋谷区	○	池	×
柳の水	"	×	井戸	○	※	"	○	池	×
溜池	港区	×	池	×	※	"	×	池	×
鹿島の清水	"	×	井戸(湧水)	○	※	"	○	池	×
※	"	×	滝	×	—	調布市	×	池	×
※	目黒区	○	池	×	—	}	}	池(湧水)	×
独鈷の滝	"	×	滝(湧水)	○	—	}"	}"	池	○
—	"	○	池(湧水)	×	深砂大王影向池	}"	}"	池	○
星の井	世田谷区	×	井戸	×	※	国分寺市	○	池	○
医王の水	港区	×	井戸	×	鼻井	日野市	○	井戸(湧水)	○
朝霧が滝	渋谷区	×	滝	×	弁井	"	○	井戸	
金王麿産湯の水	"	×	湧水	×	※	稲城寺	○	池	
(神皇正統記の山池)	"	○	池(湧水)	×	—	府中市		滝	
甘露の水	渋谷区	×	湧水		※	"	○	池	
玉池	"	×	池	×	—	"	×	井戸	○
神仙水	"	×	湧水	×	弁慶硯水の井	"	×	池(湧水)	○
蛇池	目黒区	×	池		常磐の清水	国立市	×		○

①卷之四

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
—	新宿区	○	湧水	×	山の井	豊島区	○	井戸	×
※	"	×	池	×	蟹が池	文京区	○	池	×
蜘蛛の井	"	×	井戸(湧水)		—	"	○	池	×
(御手洗池)	"	×	池	×	星谷の井	豊島区	×		
井の頭池	三鷹市	×	池	○	星の清水	文京区	×	井戸	○
鳳凰池	}"	}"	池	○	(丸池)	豊島区	×	池	○
鳳凰池	}"	}"	井戸		極楽水	文京区	×	井戸(沼水)	○
霊亀水	}"	}"	池(湧水)	×	—	板橋区	×	井戸(湧水)	
放生池	"	×	湧水	×	※	練馬区	○	池	×
(神泉)	}"	}"	池	×	—	杉並区	×	湧水	○
守宮の池	"	}"	湧水	○	遅野井	練馬区	×	池	○
山吹の井	"	○	湧水	○	三宝寺池	瑞穂町	×	池	○
鏡が池	豊島区	×	池	×	狭山の池				
※	"	○	池	×					

⑤卷之五

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
不忍池	台東区	×	池	○	※	北区	×	池	×
※螢沢	"	○	池	×	(垢離場)	}"	}"	滝	×
(根津神社の林泉)	文京区	○	池	○	※(弁天池)	}"	}"	池	×
※	台東区	×	池	×	不動滝	"	×	滝	×
※螢沢	文京区	○	池	×	亀が池	"	×	池	×
染井	豊島区	×	湧水	×					

⑥卷之六

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
—	}"	}"	井戸	×	※	足立区	×	池	
—	}"	}"	井戸	×	—	荒川区	×	池	×
(御手洗池)	}"	}"	池	×	—	"	×	湧水	×
—	}"	}"	池	×	鏡が池	台東区	×	池	×
姥が池	"	○	池	×	—	"			
—	台東区	×	湧水		※(円光寺の林泉)	台東区	○	池	×
※	"	○	池	×	※(正燈院の林泉)	"	○	池	×
※	"	×	池	×	※	荒川区	×	池	×
妙竜水	"	×	池	×	※(阿伽井)	足立区	○	井戸	○
※	"	○	池	×	※	"	×	池	×

◎卷之七

池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無	池泉名	現在地	庭園の有無	池泉の状態	現在池泉の有無
(永代寺の材泉)	江東区	○	池	×	—	墨田区	○	池	×
※ —	"	○	池	×	※ —	"	×	池	×
※ —	"	○	湧水		※ —	"	○	池	×
寺境池	"	○	池	×	—	"	○	池	×
(芭蕉庵の古池)	"	○	池	×	※さらし井	"	×	井戸	×
(蓮池)	"	○	池	×	長命水	"	×	井戸	○
※ —	墨田区	○	池	×	—	}	}	湧水	×
※ —	"	○	池(湧水)	×	(秋葉神社の林泉)			池	×
(蓮池)	"	○	池	×	※ —	"	×	池	×
※ —	江東区	○	池	×	※ —	"	○	池	×
※ —	"	×	池	×	丹頂の池	"	×	池	×
(御手洗池)	"	○	池	○	※ —	足立区	×	池	×
茲眼水	"	×	池	×	—	葛飾区	×	池	×
※ —	"	○	池(湧水)	×	※ —	江戸川区	○	池	
※ —	墨田区	×	池	×	—	"	×	池	○
※(竜眼寺の林泉)	江東区	○	池	×	※ —	"	×	池	
※ —	墨田区	○	井戸(湧水)	×	鏡が池	"	×	池	○

注) ※ 印……印は、本文の記述ではなく、挿絵のみに掲載されているもの。無印は記述と挿絵、あるいは記述のみ掲載されているもの

池泉名……「名所図絵」の名称で( )は固有名詞ではなく—は名称が記載されていないもの  
空欄は不明のもの。

3. 池泉庭園とその変遷

3.1 池泉庭園の類型

前節第3表に掲げた東京の池泉の水源を考察すると、出現数では湧水が圧倒的に多いが、他に東京湾、隅田川をはじめとする各河川、井戸、上水等に水源を求めていることを知る。その水源の特性により池泉庭園を類型化すれば、海水(塩水)系と淡水系に大別され、さらに淡水は、第4表のように、潮入り、地下水(湧水+井戸水)、河川水、上水、水道水のタイプに細分される。

上記の水源別により、池泉庭園の名称を以下、潮入型庭園、上水型庭園、湧水型庭園、井戸水型庭園、河川水型庭園、水道水型庭園と呼称する。

3.2 水源の変化状況

(1) 水源変化のリスト作成

第3表および位の資料により抽出された、池泉庭園65カ所について、①作庭時の水源、②現在の水源、③水源の変化の原因を調査した。その結果は第5表のとおりである。

第5表に示された池泉庭園の時代別内訳は、江戸期の作庭によるものが50庭園、明治・大正・昭和期の作庭によるものが15庭園である。なお、昭和期に多くの池泉庭園がつけられたが、変遷をたどるほどの時期を経ていないこと、また水源自体に変化がないものが多いので調査の対象から除外した。

第5表により、池泉庭園の水源の変化の特徴を知るため、作庭時と現在の水源の変化数とその割合を求めれば、

第4表 池泉庭園の類型

水系	水源型	池泉庭園の代表例	摘要
海水	潮入型	蓬来園(E)、浜離宮庭園(E)、芝離宮庭園(E)、清澄庭園(M)	水位の干満を利用
淡水	湧水型	亀戸天神(E)、明治神宮(T)、東禅寺(E)、滄浪庭園(T)	崖地・低地に多数
	井戸水型	古河庭園(T)、般若園(S)	台地に少数
	河川水型	大久保庭園(E)、向島百花園(E)	低地に少数
	上水型	六義園(E)、二の丸庭園(E)	江戸期の台地
	水道水型	グランドパレス(S)等多数	明治以降上水に代替

表中 (E)は江戸、(M)は明治、(T)は大正、(S)は昭和を示す

第6表, 第4図のようになる。

第6表中, 水道型10カ所について割合を示してあるが, その割合は調査対象の65カ所についてであり, 最近つく

られる池泉庭園の大半は水源を水道に依存しているの  
で, 調査対象外の池泉庭園を含めれば, 水道型の割合は  
著しく大となるはずである。

①潮入型庭園

第5表 池泉庭園と水源の変化状況

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項(変化理由等)	
	作庭時	現在		作庭時	現在		
江	浜離宮	左同	中央区	潮入	→		
江	浴恩園	×	"	潮入	×		
江	旧芝離宮	左同	港区	潮入	雨水	T.12	海岸の埋立て、湯水時に水道で補給
江	蓬萊園	×	台東区	潮入	×	S.初 12	三味線堀埋立て破壊
江	旧安田庭園	左同	墨田区	潮入	水道		現在、人工的な干満あり
明	清澄庭園	左同	江東区	潮入	雨水、水道	T.12	関東大震災で水門破壊

②湧水型庭園

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項(変化理由等)	
	作庭時	現在		作庭時	現在		
江	紀伊家(中)庭園	清水谷公園	千代田区	湧水	井戸		ビル建設の条件としての井戸
江	松平(高松)家(下)庭園	白金自然教育園	港区	湧水	→		湧水が減り、水を循環
江	紀伊家(上)庭園	赤坂離宮	"	湧水	水道		
江	南部(盛岡)家(下)庭園	有栖川記念公園	"	湧水	→井戸		井戸水で補給
江	東禅寺	左同	"	湧水	→		東電地下発電所建設により、水源涸渇の恐れあり
江	箕田園	×	"	湧水	×		
明	根津美術館庭園	左同	"	湧水	→		
江	将軍家狩獵地	おとめ山公園	新宿区	湧水	→		
江	清水家庭園	甘泉園	"	湧水	→		
江	松平(高松)家(別)庭園	大隅庭園	"	湧水	井戸	S.30	井戸を掘る、その他水道で補給
江	済松寺庭園	左同	"	湧水	井戸		
江	大宗寺庭園	新宿公園	"	湧水	雨水		
江	細川(肥後)家庭園	新江戸川公園	文京区	湧水	井戸	S.50	都市化で湧水減少、貯水槽を制している
昭		須藤公園	"	湧水	井戸	S.47	都市化で湧水減少、井戸を掘る
江	伝法院庭園	左同	台東区	湧水	→井戸		都市化で湧水減少、井戸で補給
江	亀戸天神	左同	江東区	湧水	→		現在も豊富な湧水量を保つ
江	東海禅寺	×	品川区	湧水	×		明治維新で上地、作庭は小堀遠州
江	灌漑用貯水地A	碑文谷公園	目黒区	湧水	井戸		} 立会川水源
江	灌漑用貯水地B	清水池公園	"	湧水	井戸		
江	千束池	洗足公園	大田区	湧水	河川		
昭	五島美術館庭園	左同	世田谷区	湧水	→		
江	高源院	左同	"	湧水	→		
大	明治神宮	左同	渋谷区	湧水	→		旧井伊家所有
明	鍋島松濤公園	左同	"	湧水	→		

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項(変化理由等)
	作庭時	現在		作庭時	現在	
江	善福寺池	善福寺公園	杉並区	湧水	井戸	S.30 湧水停止、S.32~39 千川上水、S.41主力の井戸完成  S.43 46 湧水涸渇、周辺都市化井戸完成  井戸の深さ：200m 周辺都市化、将軍狩獵地、神田川の水源 野川上流、国分寺崖線のハケ 野川上流、国分寺崖線のハケ  水道で補給、循環
江	妙正寺池	妙正寺公園	"	湧水	井戸	
江	前野町池(仮称)	見次公園	板橋区	湧水	→	
江	高塚城跡	ため池公園	"	湧水	井戸	
江	三宝寺池	石神井公園	練馬区	湧水	井戸	
江	富士見池	武蔵関公園	"	湧水	井戸	
江	東大泉弁天池	左同	"	湧水	→水道	
江	名主の滝	名主の滝公園	北区	湧水	井戸	
江	井の頭池	井の頭公園	三鷹市	湧水	井戸	
大	滄浪泉園	左同	小金井市	湧水	→	
大	殿ヶ谷戸公園	左同	国分寺市	湧水	→	
江	深大寺	左同	調布市	湧水	→	
江	椿山	椿山荘	文京区	湧水	→水道	

③上水型庭園

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項(変化理由等)
	作庭時	現在		作庭時	現在	
江	皇居・二ノ丸庭園	左同	千代田区	上水	水道	S.43 玉川上水の廃止、元玉川上水を使用 元玉川上水を使用、庭園を玉川園といった 現、戸山ハイツ S.43 神田上水の廃止、水戸家上屋敷 S.43 千川上水の廃止 S.46 <sup>(地下鉄工事の)</sup> <sub>(ため井戸)</sub>  元品川用水を使用 現在、井戸水を水道で補給 三田用水の廃止。S.8 井戸
江	内藤(高遠)家下庭園	新宿御苑	新宿区	上水	(湧水)井戸	
江	戸山山荘	×	"	上水・湧水	×	
江	小石川後楽園	左同	文京区	上水	井戸	
江	六義園	左同	"	上水	井戸	
江	小石川植物園	左同	"	上水	井戸	
江	細川家庭園	戸越公園	品川区	上水	井戸(水道)	
昭	雅叙園	左同	目黒区	用水	水道	

④河川水型庭園

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項(変化理由等)
	作庭時	現在		作庭時	現在	
江	大久保家庭園	八芳園	港区	河川	水道	旧大久保彦左衛門邸、元河川のたまり水 河川の下水道化、京成電鉄の湧水と雨水による 昔は荒川の入江、水道や井戸水は使用せず 享保14年、灌漑用水、現在、大場川から揚水、古川を改造、江戸川から揚水
江	寛永寺	上野公園	台東区	河川	井戸	
江	浮間池	浮間公園	板橋区	河川	伏流水	
江	小合溜	水元公園	葛飾区	河川	河川揚水	
昭	古川親水公園	左同	江戸川区	河川	河川揚水	



⑤井戸水型庭園

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項（変化理由等）	
	作庭時	現在		作庭時	現在		
昭	靖国神社庭園	左同	千代田区	井戸	水道	S.33	庭園完成
昭	般若若園	左同	港区	井戸	水道		
大	旧古河庭園	左同	北区	井戸	→		

⑥その他

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項（変化理由等）	
	作庭時	現在		作庭時	現在		
明	日比谷公園	左同	千代田区	堀	雨水	S.39	湯水時に水道で補給、日本庭園の池は昔の堀の跡開園、善福寺川から揚水元、町人の別荘
昭	和田堀公園	左同	杉並区	沼地	河川揚水		
江	向島百花園	左同	墨田区	農業用水	井戸	S.55	公園改修
江	細川(肥後)家下庭園	浜町公園	中央区		水道	S.53	公園改修、水道以前は雨水
江	水戸家下庭園	隅田公園	墨田区		水道	S.21	旧伏見宮邸を改修
江	加藤家庭園	オータニ庭園	千代田区		水道		

⑦廃園

作庭年代	池泉庭園名		所在地	水源		特記事項（変化理由等）	
	作庭時	現在		作庭時	現在		
江	旧酒井邸	×	中央区		×	酒井(姫次)中屋敷	
江	楽々園	×	新宿区		×	明治維新上地、尾張家上屋敷、M.8陸軍士官学校が置かれる。現陸上自衛隊駐在地。	
江	旧酒井邸	×	"		×	酒井(小浜)下屋敷	
江	旧松平邸	×	"		×	松平(美沢・高須)家	
江	灌楽園	×	"		×	中山(丸亀)下屋敷、甘泉園(東隣)	
江	育徳園	×	文京区		×	前田(加賀)家、三四郎池が残存	
江	六園	×	"		×	松平定信抱屋敷	
江	占春園	×	"		×	松平大学(奥州守山)下屋敷	
江	旧藤堂邸	×	"		×	藤堂(伊勢、津)下屋敷	
江	浩養園	×	墨田区		×	戦後工場拡張で消滅	
江	雀林園	×	江東区		×	蜂須賀(松平、阿波)下屋敷	
江	旧松平邸	×	目黒区		×	松平定主殿頭(良原)下屋敷	

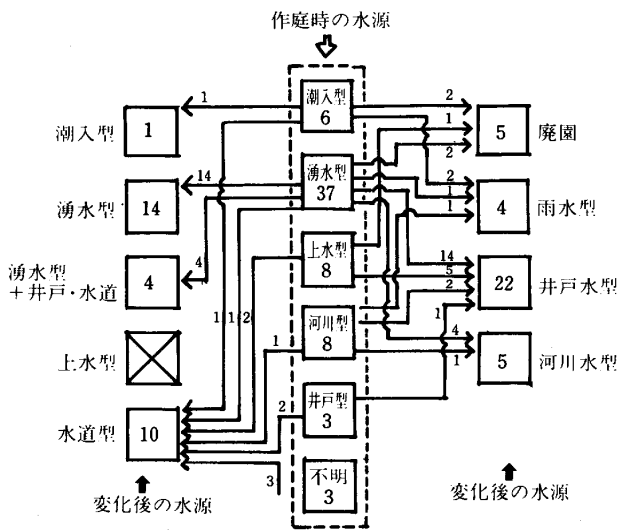
(2) 作庭時における水源の状況

- 65カ所の池泉庭園のうち、湧水型庭園が37カ所、その割合は56.92%となり、最も高率である。
- つづいて上水型庭園(用水を含む)が多く8カ所であるが、その割合は12.31%にすぎない。また潮入型庭園は東京の特色ある庭園であるが、数は限られており6カ所、その割合は9.22%である。

- 作庭時についても、江戸と明治以降とでは水源の種類に大きな変化がみられ、上水に変わって井戸への転換がおきてくる。

作庭時と現在の水源の変化

- 現在、上水型庭園は上水の廃止にともなって完全に消滅している。
- 潮入型庭園は6カ所(9.22%)から1カ所(1.54%)



第4図 水源の変化の総括図

に減少した。

- 湧水型庭園は37カ所 (56.92%) から14カ所 (21.54%) に半減し、その多くは井戸水型庭園へ移行している。
- 水源別にみた池泉庭園の変化状況を図により総括すれば、第4図のとおりである。
- 第4図によれば、明治以降になってから、潮入型、湧水型、上水型、河川型、井戸型、不明のいずれの池泉庭園からも水道型へ移行していることが判然と分るであろう。
- 同図によれば、現在3カ所の雨水型の庭園は作庭時には潮入型、湧水型、河川型の庭園であり、水源涸渇と同時に雨水に頼らざるを得ないということは事後対策の不備をも示すものである。
- 湧水型の庭園から井戸型への移行が14カ所で行われていることは地下水位の低下を如実に物語るものである。
- 湧水型の庭園が大量に消滅したとはいえ、現在14カ所が健在であることから、池泉庭園の主役であるこれらの庭園の水源保護対策を真剣に考える必要がある。

### 3.3 池泉庭園の変化状況

江戸の主要な庭園が湧水に依存していたことは、すでに前項において指摘したとおりであるが、その時系列上の変化を辿ると庭園は時代の影響を直接受け、あるものは消滅し、あるものは水源を他に求めざるをえない状況を知ることができる。つぎに水源が変化することによる池泉庭園の変貌の調査結果を示す。

水源を他に求めざるをえない例として、①潮入が停止した場合、②地下水 (湧水、井戸水) の涸渇による場合、③河川の廃止による場合、④上水の廃止による場合、⑤水道が新設された場合があり、加えて、⑥庭園が廃止される社会的背景についても検討する必要がある。

#### (1) 潮入が停止した場合

潮入庭園はその立地を海岸部に限定しているから、東京湾の海水を利用できるかぎり庭園は存続する。6カ所の潮入庭園は、江戸から昭和にかけて比較的多くその機能を保持し続けた。浜離宮は現在に至るも潮入庭園としての名を失っていない。

しかし他の5庭園はその機能を完全に失った。その原因を調べると、海水そのものの流入障害によるものではなく、埋立による流入口付近の土地形状の変化、関東大震災による破壊であった。すなわち、芝離宮庭園の場合は、明治36年 (1903) に始まる築港第3期工事として、大正12年 (1923) 芝離宮前面の埋立工事が始まり海水の流入を断れた。蓬菜園の場合は、大正12年 (1923) 関東大震災の被害を受けたことが影響している。その後東京市は江戸の名園を残すよう努力したが、所有者である松浦家の許すところとならず、昭和初年、破壊され、学校用地となった。

#### (2) 湧水が涸渇した場合

東京の湧水地帯における地下水位の低下は、各地に発生している。地下水位の低下の原因は、かつては人口増加による井戸水の使用過多によるものであったが、近年大型建築工事、地下鉄工事による地下水脈の分断と考えられている。

つぎに湧水涸渇の事例を都心部と効外部について示す。都心部において、湧水涸渇の代表例は赤坂離宮庭園と清水谷公園である。江戸期はともに紀伊家の屋敷であり、湧水による池泉があったが、現在その湧水は涸れつつある。現在、池泉への水の補給は赤坂離宮では水道水を、清水谷公園では補償工事により作られた井戸水によっている。

第6表 水源の変化の総括表

庭園数	種別	潮入	湧水	上水	井戸	水道	河川	雨水	その他	不明	廃園	合計
		カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	
作庭時の池泉庭園	江戸	5	30	7	0	0	4	0	1	3	0	50
	明治以降	1	7	1	3	0	1	0	2	0	0	15
	合計	6	37	8	3	0	5	0	3	3	0	65
現在池泉庭園	カ所	1	14	0	22	10	5	4	4	0	5	65
	割合	1.54	21.54	0	33.85	10.77	7.69	6.15	6.15	4.62	7.69	100

効外における湧水涸渇の事例として石神井公園が代表的である。戦前、谷頭部に10数カ所の湧壺があり、地下水が湧出していたが、周辺部の市街化の進行にともない昭和30年代後半（1960～）から減水しはじめ、同48年（1973）には湧水が涸渇した。現在、池泉への水の補給は2つの池の深井戸の揚水放流を実施している。

（3）河川の廃止による場合

江戸から東京にかけて数条の小河川または堀が廃止されたが、それにより庭園の水源が涸れた事例はさほど多くはない。しかし、河川の廃止により水の供給が止った代表例は上野不忍池は昭和初期まで藍染川の水を集めていたが、沿岸の市街化により同川は下水道に変じた。現在、不忍池への水の補給は3カ所の井戸にたよっている。

（4）上水が廃止された場合

東京の主要な庭園、旧江戸城の二の丸庭園、小石川後楽園・六義園などへの給水は上水を利用してしたが、江戸から明治にかけて、上水の廃止、水道の新設により、池泉庭園への給水は変更を余儀なくされた。すなわち、上水から井戸または水道への転換である。

3.4 池泉庭園の地理的分布特性

現在する池泉庭園の地理的分布の調査結果は、第5図、

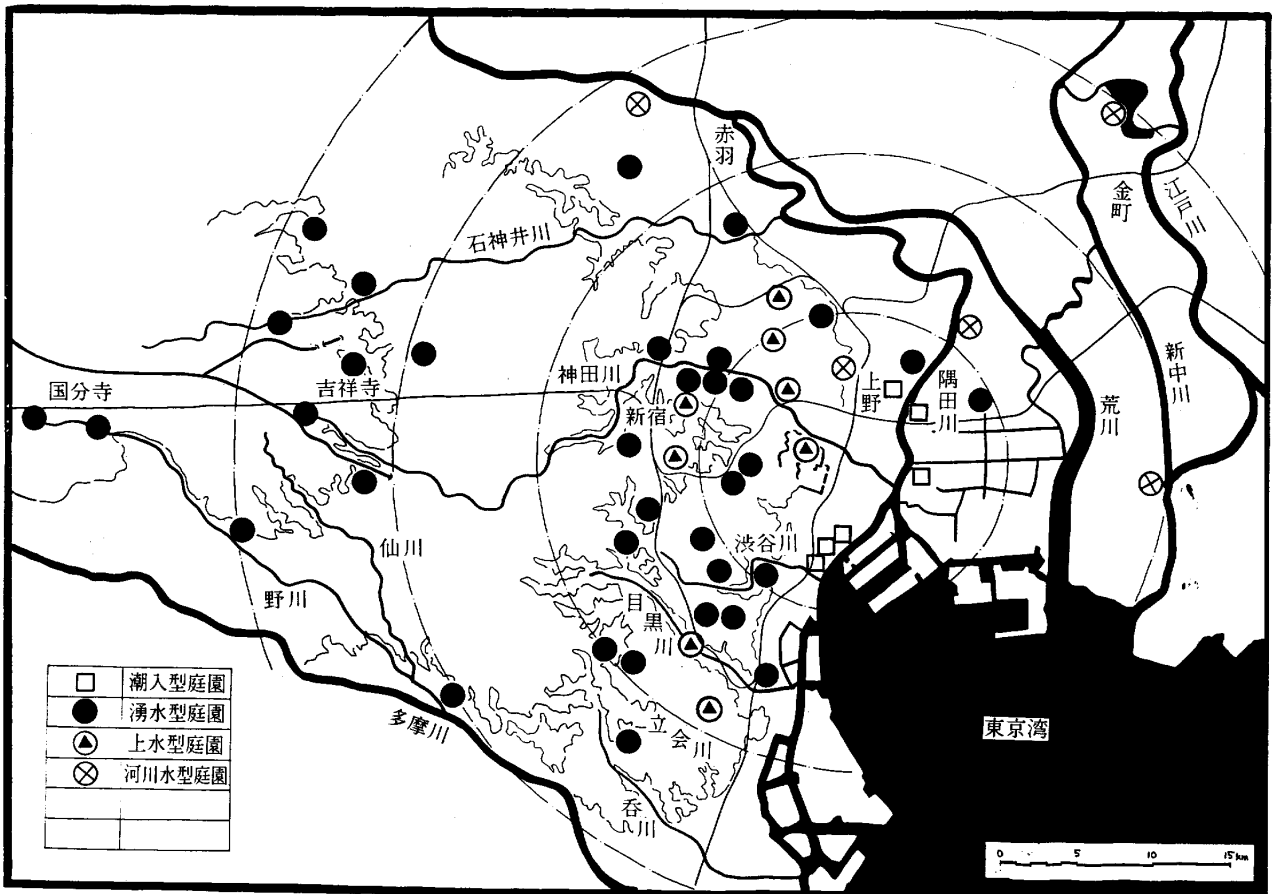
第6図のとおりである。第5図、第6図は第5表および現地踏査により作成された。ただし、第4表の池泉庭園65カ所の中には正確な位置を確認できないものがあること、また所在地が遠距離にあり図上にプロットできないことから、図示した池泉庭園は第5図では53カ所、第6図では59カ所となった。

第5図、第6図によれば、池泉庭園の分布は江戸・東京の地勢的特徴をよく反映しているといえる。

●隈田川河口部

東京湾岸が長距離にわたるにもかかわらず、潮入型庭園はごく限られた範囲、すなわち、隅田川河口部にのみ存在している。江戸期6カ所の潮入型庭園は現在浜離宮庭園1カ所だけであるが、それも外提と水門の建設により潮入は停止し潜在的機能を持つのみである。

潮入型庭園が他の淡水利用の庭園と比較して少ない理由は、①海岸が江戸期から今日まで埋立により絶えず変化していること、②海岸線は古くから船付場や物質の集積所により占められ、居住地が少なかったこと、③潮の干満を利用するため、広い水面でないと効果が少なく、敷地の小さい個人の屋敷ではつくりにくいことなどを指



第5図 東京の池泉庭園（作庭時）



- 5 浜田義一郎（1845～1865）江戸切絵図 東京堂出版
- 6 東京都水道局編（1952）東京水道史 同局
- 7 同上（1980～81）水道ニュース 同局
- 8 東京都建設局（1980）水源調査書類 同局
- 9 東京都公園協会監修（1981）東京公園文庫 六義園  
森守, 浜離宮庭園 小形雄三, 小石川後楽園 吉川需,  
郷学舎